

日蓮大聖人のご生誕日に思う - 近刊「法華経入門」の不正 2026年2月16日  
池田先生が「法華経の智慧」でご指導された日蓮仏法の真義を無視する不知恩の書

創価高・大学4期 団斉 修

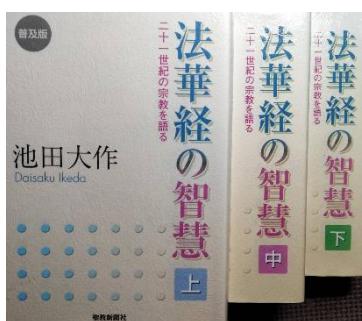
(以下、赤青茶字、下線は図齊記す)

本日、日蓮大聖人のご生誕日、御本尊に心より報恩感謝申し上げます。私は先週11日、戸田先生のご生誕日に2つの拙文を記し皆様に配信致しました。

<https://share.google/WpvepijhfvjPmgI6p> <https://share.google/OfGtLZVDIWHxIMD2U>



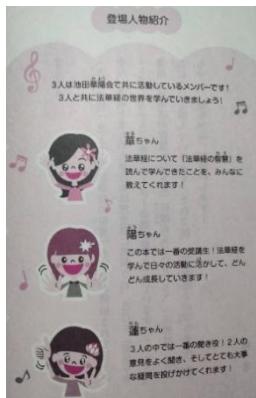
その後、1月26日発刊「対話で学ぶ 法華経入門 創価学会女性部編」(以下「入門」と略)を読みました。結果、私は愕然、啞然としました。これは池田先生が「法華経の智慧」で垂教された日蓮仏法の真義を記さず、池田先生のご指導に完全に違背している！からでした。



先生が万代の世界広宣流布のために残された  
玉稿「法華経の智慧」普及版上 55.56 頁には—法華  
経の真髓を説かれたのが大聖人です。法華経を学ぶ  
ことは、大聖人の仏法を学ぶことに通ずる。大聖人  
の仏法を学べば、法華経も分かっていく。表裏一体  
です。ゆえに法華経を語ることは、ただ釈迦仏法の  
みを探究することではない。大聖人の仏法の、はる  
かな未来を見つめての壮大な挑戦なのです。—と。

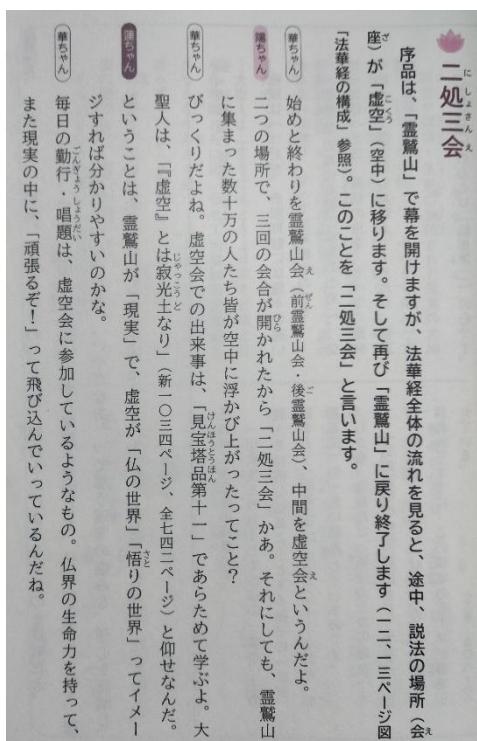
しかし、「入門」は終始一貫して、法華経文上の釈迦仏法の解説だけです！

この現実を日蓮大聖人と池田先生はどれほどご立腹か、私は心痛の極みです。ゆえに私は、日蓮大聖人の弟子、また、池田門下生の責務、使命として、この拙文で「法華経の智慧」原本(以下「原本」と略)と「入門」の内容がどれほど乖離しているかを客観的に引用して比較しました。その結論は—「入門」が「原本」を引用して語る以上は、池田先生が教示された日蓮本仏論の真義、就中、**日蓮大聖人は久遠元初自受用身**であられ、大聖人が顯された曼荼羅本尊は、まさしく大聖人様そのもの、即ち、**人法一箇の御本尊**であることを無視してはならない。しかし「入門」がその真義を記していないことは、日蓮大聖人と池田先生への完全な背信であり、不知恩の極みである！—です。 1/21



左：華ちゃん 法華経について「法華経の智慧」を学んできたことを、みんなに教えてくれます！－とあります。

以下、「入門」の重要なところを引用し、それに対して池田先生の「原本」を引用、どれほど「入門」が浅薄であり、「原本」について語る池田華陽会、華さんの「原本」読書が不完全であり、池田先生の本意を理解していないかを明白にします。「入門」の序品には以下記述です。



「入門」19頁、序品には一毎日の勤行・唱題は虚空会に参加しているようなもの。仏界の生命力を持って、また現実の中に、「頑張るぞ！」って飛び込んでいっているんだね－と。

それに対し「原本」上114頁、序品で一池田 じつは、大聖人の仏法と釈尊の仏法の特質の違いを、この「二処三会」の構造を借りて説明することができる。

須田 どういうことでしょうか。

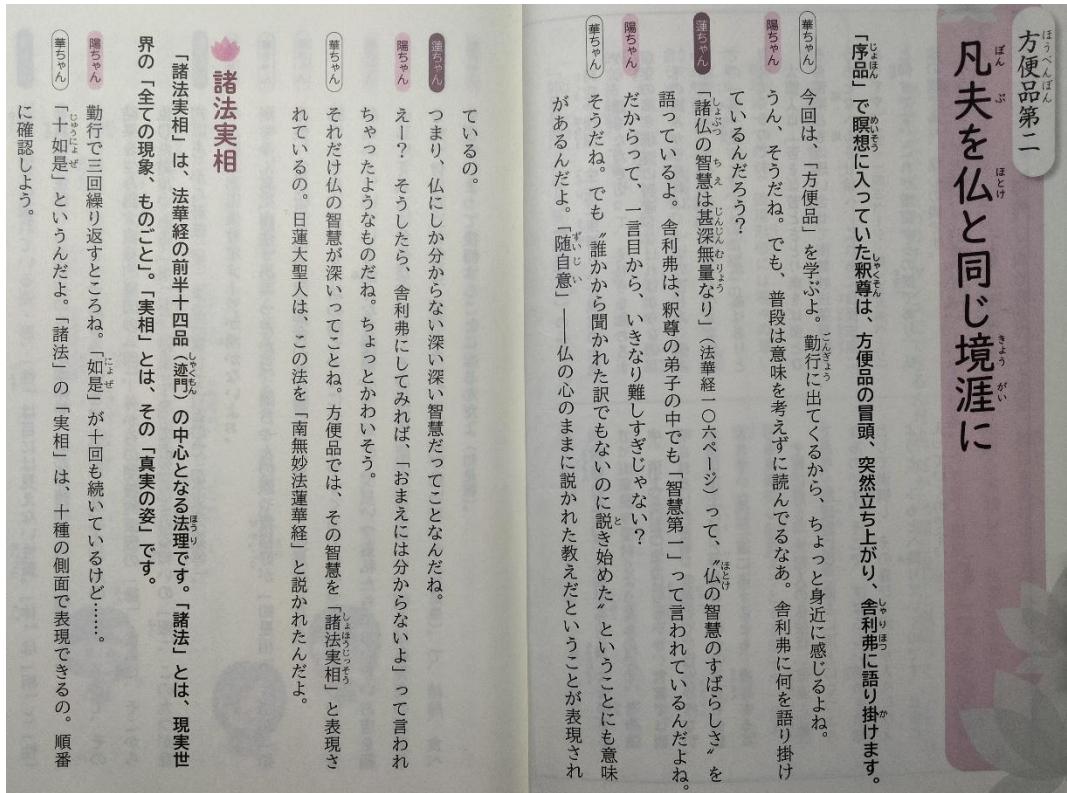
池田 釈尊の仏法は、どちらかといえば、靈鷲山から虚空会へ、すなわち現実生活から仏の智慧の世界を求めていく仏法です。

虚空会で説かれる寿量品（第十六章）の文底に秘し沈められた「南無妙法蓮華経」が目標であり、ここに到達しようとする仏法

です。これに対し、寿量文底から靈鷲山へ、すなわち「南無妙法蓮華経」から現実生活へと向かう方向が強く出てくるのが大聖人の仏法です。また、上123頁には、一日蓮大聖人は虚空会の儀式を借りて、御自身の内証の悟りを御本尊に示してくださった。この御本尊を信受している私どもこそ、法華経のダイナミズムを、そのまま生活に反映させているのです－と。

(私見) 池田先生は序品において、結論の一寿量品の文底に秘し沈められた「南無妙法蓮華経」、また、日蓮大聖人御自身の内証の悟りの御本尊－を明確にご指導なのです。しかし「入門」は、この日蓮仏法の真髓について何も記さない。これは、冒頭から「原本」の真義、池田先生のご指導を無視していると言わざるを得ない！

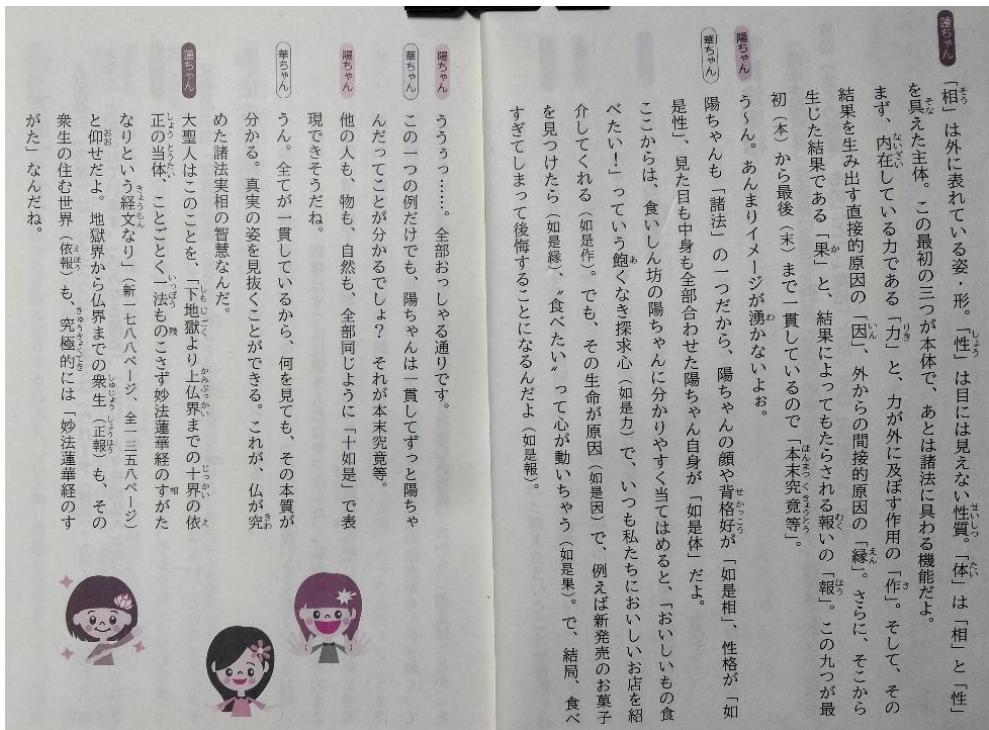
次に、「入門」22, 23頁、方便品第二には以下記述です。一



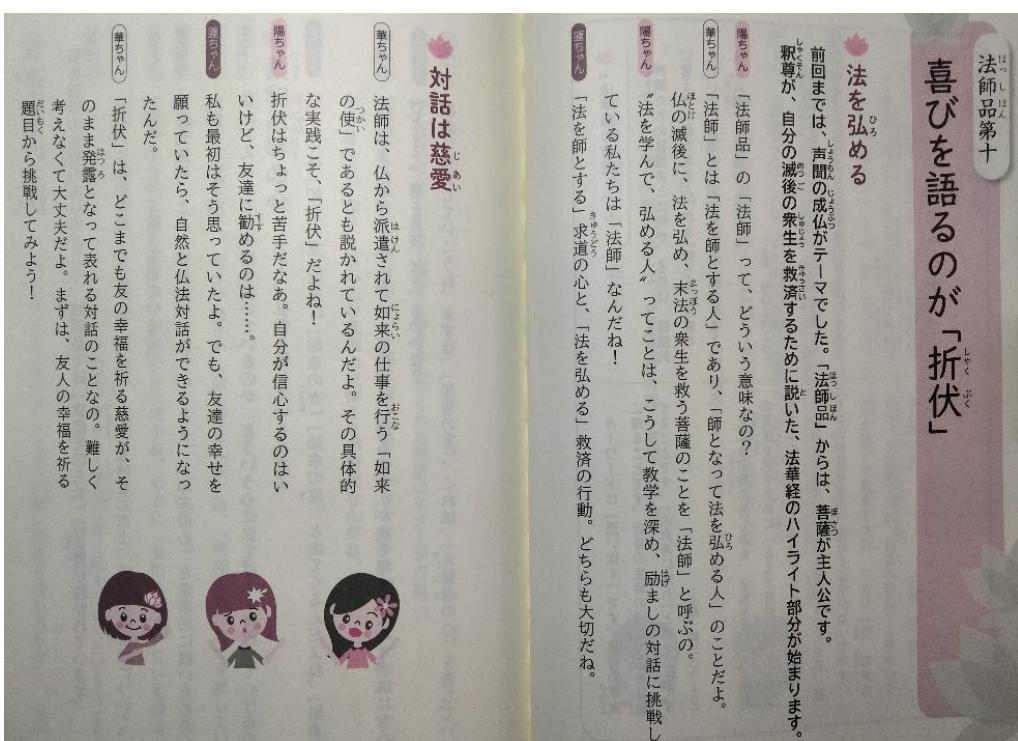
上記に対し「原本」上199頁、方便品で池田先生は—「一念三千の法門を振り灌ぎたてたるは大曼荼羅なり」と。一念三千の「一念」は実相、「三千」は諸法です。御本尊は、諸法実相の御本尊であり一切衆生の諸法実相を映す”鏡”です。中央の「南無妙法蓮華経 日蓮」は実相を表し、左右の十界は諸法を代表しています。この諸法実相の御本尊に向かって唱える妙法の音声は、我が身の仏性を呼びます。呼ばれた仏性は外に顯れようとします。すると、自覺するとしないとにかくわらず、胸中に「仏界の十如是」の太陽が昇る。本有の青空が、厳然と我が胸に広がるのです。御本尊を信じ、「南無妙法蓮華経」と唱えることによって、自身（諸法）が妙法の当体（実相）と輝くのです。まさに万人に開かれた「一生成仏」の修行法です。外にある御本尊も「妙法蓮華経」。内なる我が一心も「妙法蓮華経」。御本尊を”信する”ことが、同時に、我が身の諸法実相を悟る”智慧”になっている。「以信代慧（信を以て智慧に代える）」の法門です」と。

（私見）「入門」の諸法実相の解説には、上記の続き24、25頁（次頁に掲示）も含め、「原本」方便品での先生のご指導—御本尊は、諸法実相の御本尊であり一切衆生の諸法実相を映す”鏡”です。中央の「南無妙法蓮華経 日蓮」は実相を表し、左右の十界は諸法を代表—がないのです！「入門」の24頁のお菓子の話も楽しいですが、これでは画竜点睛を欠いた方便品であり、池田先生のご指導を理解しない、拝していない！と言わざるを得ません。

続く24, 25頁は諸法実相についての解説、これでは浅薄すぎる！



続いて、「入門」78, 79頁、法師品第十には以下の記述です。



上記「入門」の記述—「法師」とは「法を師とする人」であり、「師となつて法を弘める人」のことだよ。仏の滅後に、法を弘め、末法の衆生を救う菩薩のことを「法師」と呼ぶの一とだけ。

それに対して、「原本」上、法師品 437 頁には—  
遠藤 そこに法師品以降が大切であるゆえんがありますね。大聖人は、法師品から安樂行品（第十四章）までの五品は、その前の八品で明かした「一仏乗」の法を、末法の凡夫が、どのように修行すべきかを説いていると仰せです。（「方便品より人記品に至るまで八品は正には二乗作仏を明し傍には菩薩凡夫の作仏を明かす、法師・宝塔・提婆・勸持・安樂の五品は上の八品を末代の凡夫の修行す可き様を説くなり」）

池田「末法の凡夫」とは大聖人のことであられる。総じては、大聖人に連なる門下のことです。大聖人は、御書の隨所に、法師品など五品の經文を引用されている。法華經の中でも法師品以降、滅後について説かれた個所の引用は圧倒的に多い。それは、ここに説かれた滅後の「法華經の行者」の姿が、そのまま日蓮大聖人のお振る舞いと一致しているからです。

言い換れば、法華經を身で読まれたのは大聖人お一人である、法華經は、大聖人のために説かれたのである、という証明になっている。そして、仏を仏にした「根源の一法」である「南無妙法蓮華經」こそが法華經の真髓であり、末法のすべての衆生を救う大法であることを教えようとされたのです—と。

（私見）池田先生が「原本」に記された—法華經は、大聖人のために説かれたのである、という証明になっている—が、「法華經の智慧」の主題なのです！この重要さを、上記「入門」は全く無視し、ただ一仏の滅後に法を弘め、末法の衆生を救う菩薩の事を「法師」と呼ぶの一と。これでは、池田先生のご指導の真意とはいえない！

\*重要な参考：池田先生の「御義口伝講義」上 584 頁、法師品には—  
法師の「法」とは南無妙法蓮華經、「師」とは日蓮大聖人の事であり人法一箇を表しているのである—との深義が記されています。

\* \* \*

続いて「入門」86, 87, 90 頁、見宝塔品第十一には以下記述です。5/21

## 自身の生命を輝かせる

## 宝塔の出現

「見宝塔品」は、七宝でできた巨大な宝塔が大地から出現するところから始まります。

突然、大地から出てきた宝塔。その高さは地球の三分の一ほどにもなるといわれている。

しかも、七宝、つまり金・銀・瑠璃・瑪瑙などの七種類の宝玉で飾られている

んだって！

えっ！ ものすごい大きさ！ ドラマチックな展開だねー！ 宝塔っていつたい何？

どうして現れたんだろう？

「見宝塔品」には、「宝塔の由来」が説かれているよ。宝塔は、多宝如来が建立させた

もので、「妙法蓮華の法門」が説かれる所にはどこにでも出現して、それが眞実であ

ることを「證明」するんだって。

ということは、「釈尊の説法が「正しい」と證明するために宝塔が出現したんだね。それ

にしても、想像を絶する大きさときらびやかさだよね。

そうだね。でも実は、「宝塔とは「我らが一身」のことである」と日蓮大聖人は仰せ

なんだよ。つまり、宝塔とは自分自身のことを表しているの。

私たち自身の生命の偉大さを教えられているんだね。私たちは宝塔のように尊い存在

なんだ！

## 虚空会

釈尊は、地上から遙か高い宝塔を見上げている人々を空中に引き上げます。

ここから「虚空会の儀式」が始まるよ。大聖人は、虚空会の儀式を御本尊の相貌に顕されたんだ。大聖人以外には宝塔の中の二仏並座の儀式を作り顕すべき人なし」(新

一七八九ページ、全一三五八ページ)と言われているよ。

私たちが毎日、御本尊の前で勤行するのは、宝塔品の儀式に参加していることになるんだね。厳肅な行いなんだね！

上記には一大聖人は、虚空会の儀式

を御本尊の相貌に顕わされたーとだけ。それに対して、

「原本」上 480, 481 頁、見宝塔品には—

須田 釈迦・多宝の二仏は南無妙法蓮華経の一法の「働き」なのですね。釈迦・多宝という姿によって、境智不二の南無妙法蓮華経を表しているわけです。

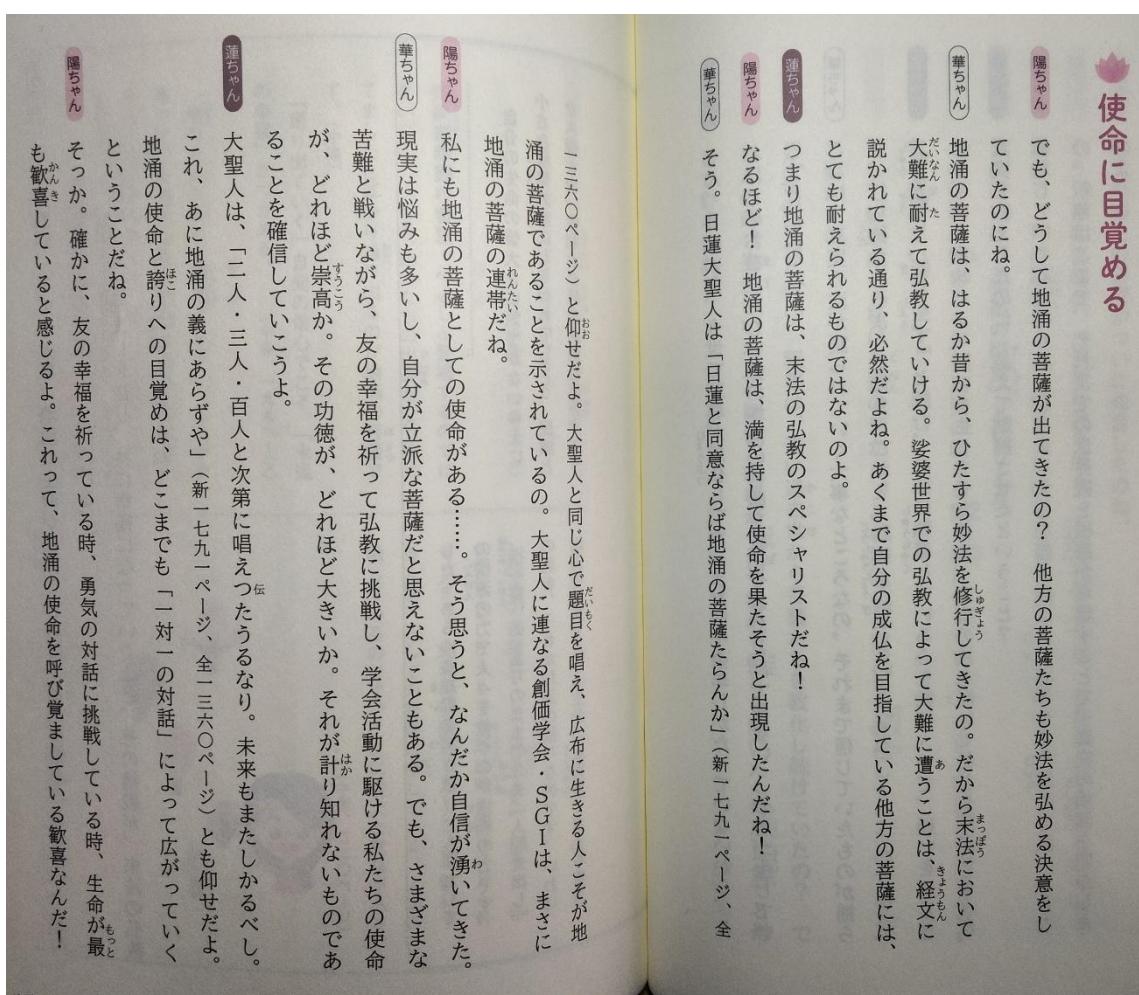
池田 そう。大聖人は「釈迦・多宝の二仏と云うも用の仏なり、妙法蓮華経こそ本仏にては御座候へ」と仰せです。明快だね。

宝塔品の儀式と御本尊

遠藤 大聖人の顕された御本尊の相貌で言えば、中央の首題に南無妙法蓮華経の一法が、その脇士として釈迦・多宝が配されている所以がまさにそこにあると言えます。斎藤 二仏並坐はまた「諸法実相」を表します。多宝が諸法、釈迦が実相です。また「生死不二」を表しています。多宝が死、釈迦が生です。須田 大聖人は、二仏並坐をはじめ宝塔品の儀式をもって御本尊を顕されました。大聖人以外には「宝塔の中の二仏並座の儀式を作り顕すべき人なし」と言われていますし、「是全く日蓮が自作にあらず多宝塔中の大牟尼世尊分身の諸仏、摺形木たる本尊なり」と断言されています。

池田 阿仏房に宝塔品の意義を説明されるに当たって、「此の法門ゆゆしき大事なり」と断られているのも、この法門が御本尊に関わる根本問題だからでしょう。一と。(私見)まさに、「原本」は池田先生の法華経文底からの御本尊の相貌の講義なのです！それを示さない「入門」は論外なのです！

## 使命に目覚める



「**入門**」**従地涌出品**の記述118～125頁の全頁で、**日蓮大聖人**は地涌の菩薩との文上解釈だけです。しかし、「**原本**」中の191～193頁には――

### 「日蓮又日月と蓮華との如くなり」

**齊藤** 地涌の菩薩も、神力品（第二十一章）では、太陽に譬えられています。（「**日月の光明の能く諸の幽冥を除くが如く斯の人世間に行じて能く衆生の闇を滅し**」（法華經五七五ページ））そうすると、地涌の菩薩もまた、教主・釈尊と等しく蓮華であり、太陽であることになりますね。

**池田** そう。この神力品の文について、大聖人はこう仰せです。「上行菩薩・末法の始の五百年に出現して南無妙法蓮華經の五字の光明を指し出して無明煩惱の闇をてらすべしと云う事なり」と。末法で法華經の肝要である南無妙法蓮華經を弘通される大聖人こそが、上行菩薩の再誕であることを示されているのです。さらに「一切の物にわたりて名の大なるなり（中略）日蓮となのる事自解仏乗とも云いつべし」と仰せです。

7/21

須田 自解仏乗とは、「みずから仏の境地を悟った」ということです。大聖人ご自身が「仏」であり、その悟りを「日蓮」という御名に込めてあるということですね。遠藤 四条金吾夫人へのお手紙でも、「法華経は日月と蓮華となり故に妙法蓮華経と名く、日蓮又日月と蓮華との如くなり」と仰せですね。

池田 「日蓮」という御名を名のられたこと自体が、大聖人こそが、法華経の御当体であるということです。大聖人こそが末法の全民衆を永遠に照らす“太陽”であり、諸仏を生んだ根源である清浄の“蓮華”——なかんずく白蓮華であることを、示されたものなのです。日蓮という御名については、重々の深義があり、くわしくは、日寛上人が「日蓮の二字の事」(『富要』三巻二五五ページ)にまとめておられる。結論を言えば、お名前自体が、大聖人こそ末法の法華経の行者であり、御本仏であるとの大宣言なのです

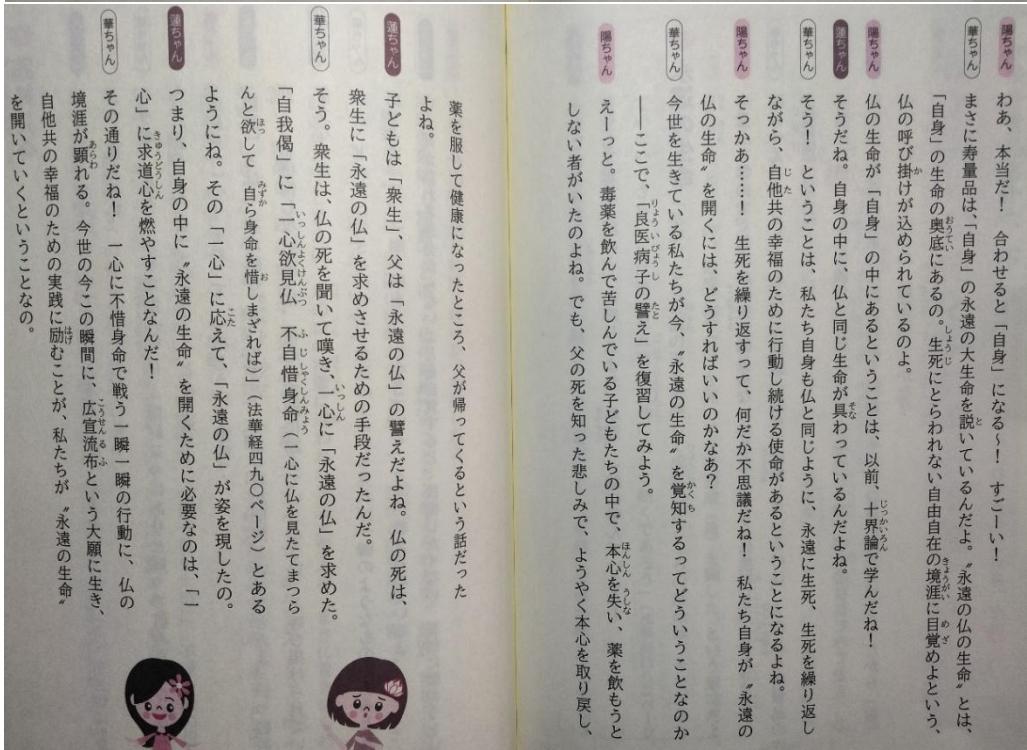
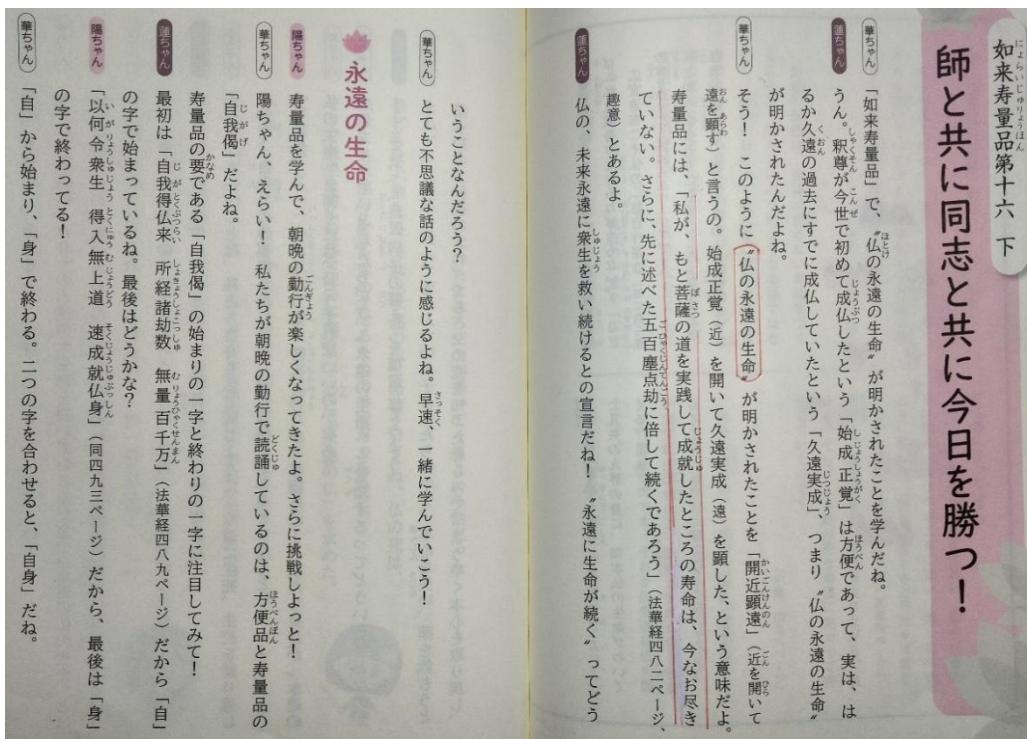
一と。

(私見) 池田先生は「法華経の智慧」の最初から最後まで、日蓮本仏論をご教示なのです！それは、序品の講義で—

寿量品の文底に秘し沈められた「南無妙法蓮華経」(本拙文2頁掲示)からこの従地涌出品第十五においても—大聖人こそが、法華経の御当体であり、御本仏である—とご指導なのです。

そして、以下、法華経本門の中心である如来寿量品第十六の一  
日蓮大聖人は久遠元初の自受用身如来であられ、日蓮大聖人が顕わされた曼荼羅御本尊は、人法一箇の御当体であられる！—との日蓮本仏論の結論へと論述が進められているのです！ その「原本」の池田先生の真意を弁えない「入門」は、まさに池田先生への違背と言わざるを得ない！ 8/21

続いて「入門」は126~149頁で、**如來壽量品第十六**について上中下に分けて解説ですが、そこには池田先生が「**原本**」でご垂教の**一日蓮大聖人は久遠元初自受用身如來**であり、曼荼羅ご本尊は**人法一箇**のご当体である一が記されず、文上で釈尊が永遠の仏としか記さず、最後の142~145頁には以下の記述です。



上記に対して、「原本」中 249、250 頁、如來壽量品には以下の記述です。—

遠藤 寿量品のあらましですが、久遠の釈尊の”過去の常住”が説かれたところまで述べてきました。寿量品では次に、仏が”未来においても常住する”ことが明かされていきます。すなわち、「私が、もと菩薩の道を実践して成就した寿命は、今なお尽きていない。」

さらに五百塵点劫に倍して続くであろう」(法華經四八二ページ、趣意)と述べられます。齊藤 未来に向けてのメッセージですね。「衆生を救う」という観点から言えば、過去よりも、むしろ未来の方に寿量品の本意があります。大聖人は、寿量品はもっぱら釈尊滅後の衆生のため、なかんずく末法のために説かれたと仰せです。ただ、過去を説いているのは、”成仏の本源に遡る”意味があるのではないかでしょうか。

池田 そうかもしない。仏の生命の根源の姿を示してこそ、生死に苦しむ未来の人々を救えるからです。その一番の本源を示唆するのが、今の「我本行菩薩道（我もと菩薩の道を行じて）」(法華經四八二ページ)の文だね。

齊藤 久遠における釈尊の成仏には、”成仏した本因”があったということです。ここを深く究めると、大聖人の文底仏法に入ります。須田 大聖人は「開目抄」で「一念三千の法門は但法華經の本門・壽量品の文の底にしづめたり」と仰せられています。では、寿量品のどの文の底なのか——古来、いろいろと論議されてきました。日寛上人は、この「我本行菩薩道」の文の底に沈められていると明快に述べられています。

池田 そうだね。「永遠の大生命」を自覚した仏の不可思議な境地を、天台は「一念三千」として表現した。その一念三千も、壽量品を魂とします。ただ、壽量品では釈尊の成仏後（本果）の不可思議な姿をもって永遠の生命を示した。これが「本果妙」です。しかし問題は現実の人間がどうしたら永遠の大生命を自覚できるかです。それを説くのが大聖人の「本因妙」の仏法です—と。

(私見) 池田先生は「原本」で、一大聖人は「開目抄」で「一念三千の法門は但法華經の本門・壽量品の文の底にしづめたり」をご教示なのに、「入門」は、この開目抄の文すら記していない！これは最大の欠陥である！

また、上記「入門」に対して、「原本」中 264,265 頁、如來壽量品には—  
釈尊の師は南無妙法蓮華經如來

池田 法と人（仏）は本来、不可分なのです。「如來」というのも「如（真如・真実の世界）からやって来たもの」ということです。すなわち「如來」とは、真実の「法」が現実の上に表れたのです。宇宙生命に”人”の側面と”法”の側面があり、それが一体なのです。少しむずかしいかもしれないが、大事なところなので、もう少し言っておこう。釈尊の説法に「法を見る者は我を見る、我を見る者は法を見る」(相應部經典（犍度篇）「長老品・跋迦梨」)という言葉がある。法を体得すれば釈尊に会うことができ、釈尊に会えば法を悟れるという意味です。

「我を見る」の「我」とは、根本的には「永遠の法」と一体となった「永遠の仏」です。寿量品では、永遠なる「常住此説法（常に此に住して法を説く）」（法華經四八九ページ）の仏身を説く。文上の法華經では、五百塵点劫以来の「久遠実成の釈尊」のことだが、その指向しているのは無始無終の「久遠元初の仏」です。釈尊が悟った「永遠の法」即「永遠の仏」は、あらゆる仏が悟った「永遠の大生命」であった。過去・現在・未来のあらゆる仏はことごとく釈尊と同じく「久遠元初の仏」を師として悟ったのです。

それが久遠元初の自受用身であり、南無妙法蓮華經如来です。

戸田先生は言わされた。「日蓮大聖人の生命というもの、われわれの生命というものは、無始無終ということなのです。これを久遠元初といいます。始めもなければ、終わりもないのです。大宇宙それ自体が、大生命体なのです」と。無始無終で慈悲の活動を続ける、その大生命体を「師」として、「人間・釈尊」は人間のまま仏となったのです。そして、悟ったとたん、三世十方の諸仏は皆、この人法一箇の「永遠の仏」を師として仏になったのだとわかったのです。一と。

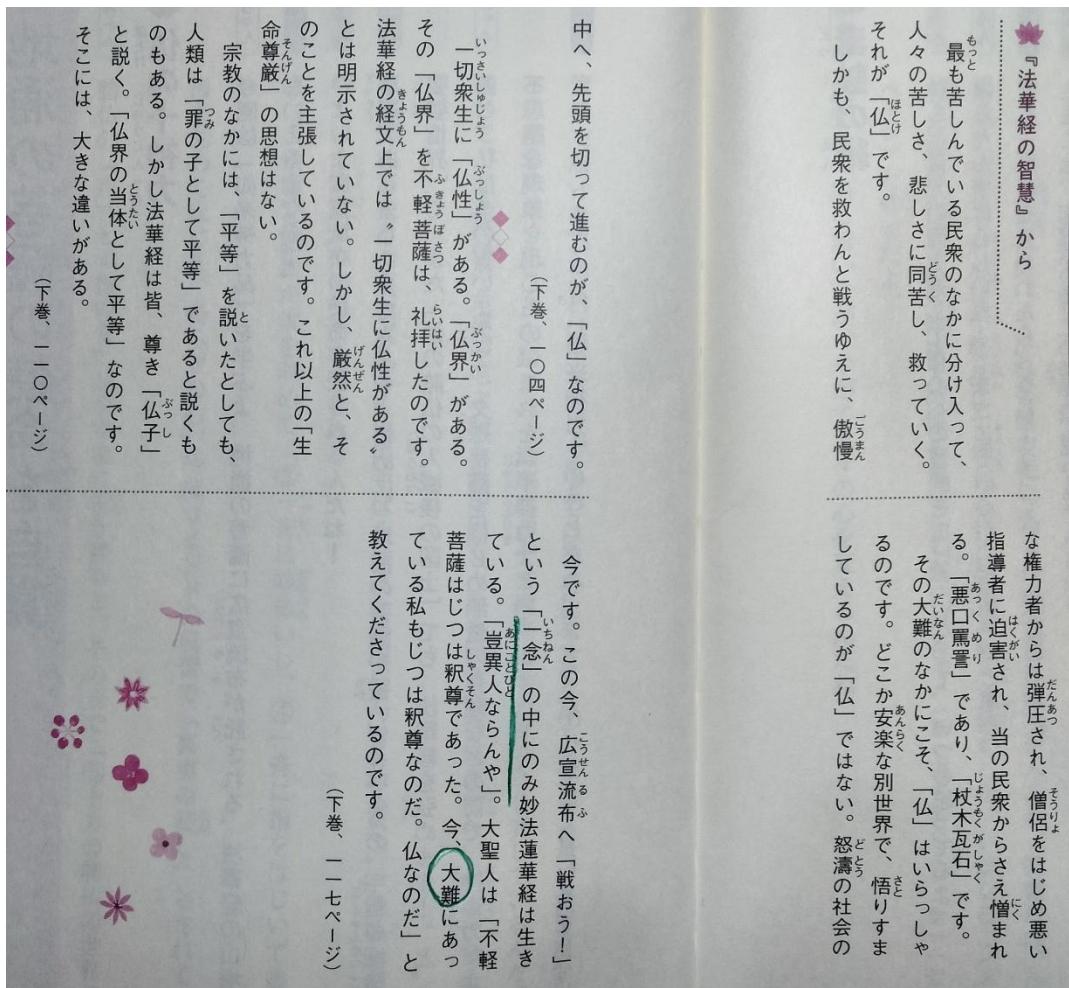
また、「原本」中 283、284 頁、如来寿量品には一釈尊の真意は「一念三千を見よ！」

遠藤 はい。先ほど、寿量品の「発迹顯本」の意義について、うかがいました。釈尊は、「永遠の法」即「永遠の仏」を師として仏になった。釈尊が師としたのと同じ永遠の法即仏を師とせよ、と弟子たちに説き明かしたのが発迹顯本である。そこには、”「人間・釈尊」に帰れ！ そして釈尊を仏にした根源に直達せよ！”との力強いメッセージが込められていた。——こうしたお話に、目の覚める思いがしました。斎藤 この「永遠の法」とは南無妙法蓮華經であり、「永遠の仏」とは南無妙法蓮華經如来すなわち久遠元初の自受用身のことですね。

池田 そうです。南無妙法蓮華經は法であるが、同時に仏身なのです。人法一箇です。ここが大事なところです。「法」といっても「人（仏）」を離れた法は、「理」だけの存在です一と。

（私見）上記こそが、池田先生の法華經を文底から読まれた結論なのです。それを全く無視しているのが「入門」であり、「法華經の智慧」を語る資格はないのです！

続いて「入門」180、181頁、常不輕菩薩品第二十には以下の記述です。



上記に対して、「原本」下116、117頁には以下記述です。一

「在世は今にあり、今は在世なり」

斎藤 一方、不輕菩薩は、その後も、生まれたびに諸仏に仕え、法華經の廣宣流布へ「心畏るる所無く」戦い続けます。そして仏になります。

池田 そこまで語って、突然、釈尊は「この不輕菩薩とは、だれのことか? ほかならぬ私のことなのだ」と宣言するのです。じつに、ドラマチックだ。

須田 遠い昔話と思っていたのが、一転、目の前の現実の話に変わる。皆、どきっとしたでしょうね。

池田 そこです。日蓮大聖人は、この「豈異人ならんや、則ち我が身是れなり（どうして別人であろうか。否、私のことなのだ）」の經文を、さらに深く我が身で読まれたのです。大難を呼び起こし、竜の口で命まさに尽きなんとするとき、発迹顯本され、生きのび命をのばされた。そして佐渡に向かう途中の寺泊で、こう仰せです。

「法華経は三世の説法の儀式なり、過去の不軽品は今の勧持品今の勧持品は過去の不軽品なり、今の勧持品は未来は不軽品為る可し」

遠藤 “今、勧持品に説かれる三類の強敵を呼び起したのは、私である”と。それは過去に不軽菩薩が戦った戦いを、今、この身でしているのであり、未来から見るならば、今私の戦いは不軽菩薩と同じとわかるであろう——と。齊藤 「三世の説法の儀式なり」。甚深ですね。

池田 「在世は今にあり今は在世なり」です。ぼやっとして、「法華経」を、紙に書いた二十八品のことと思ってはならない。仏法は「今」「この」、凡夫の「現実」のなかにしかないので。この「今」の奥底を「久遠」といい、この奥底を開くことを成仏という。それを教えたのが法華経なのです。今です。この今、広宣流布へ「戦おう！」という「一念」のなかにのみ妙法蓮華経は生きている。「豈異人ならんや」。大聖人は「不軽菩薩はじつは釈尊であった。今、大難にあっている私もじつは釈尊なのだ。仏なのだ」と教えてくださっているのです。それがわからないと法華経を学んだことにならないよ、と。

須田 法華経というのは、本（書物）のことではない——。

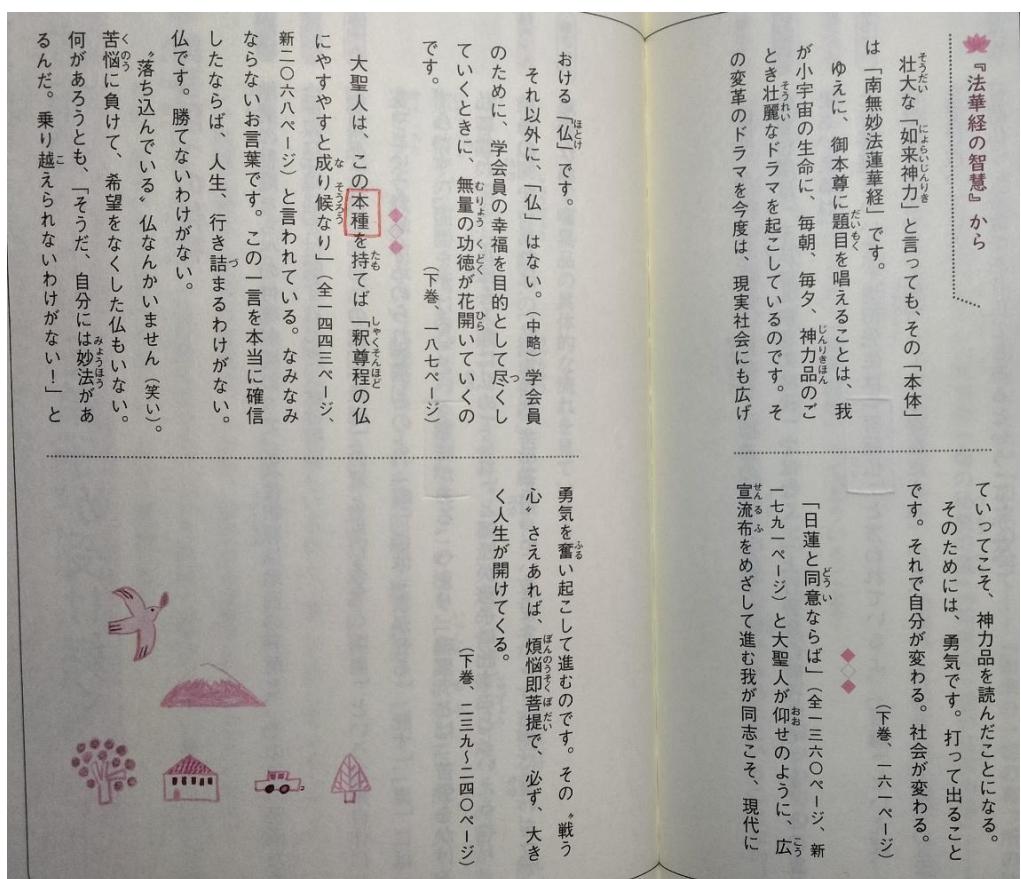
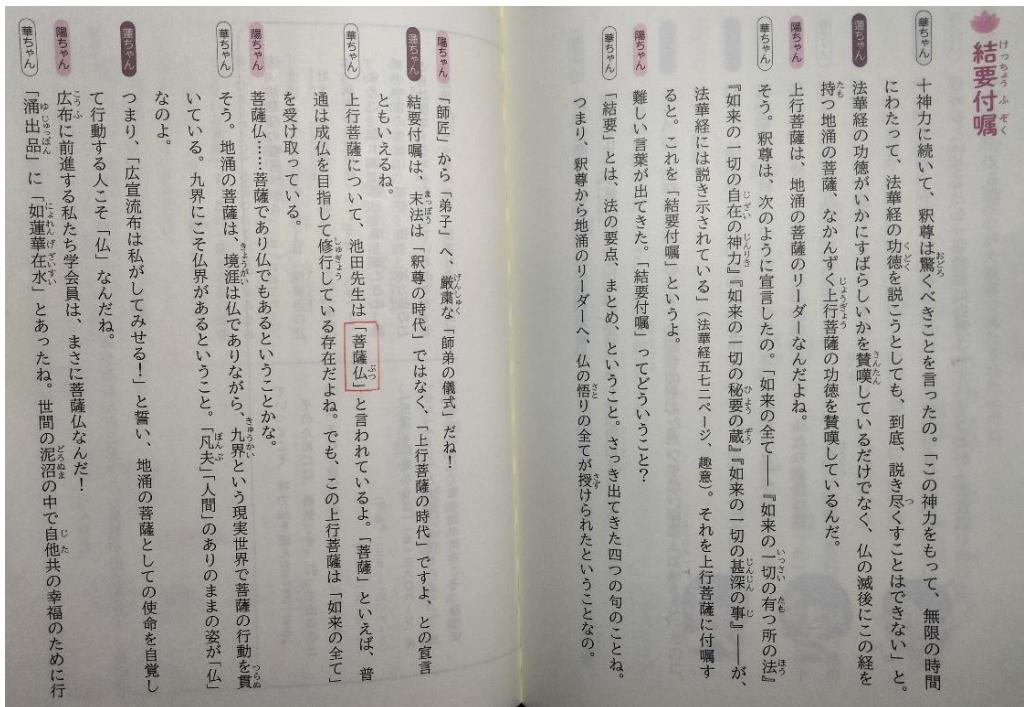
池田 戸田先生にある人が質問して「中国・インドに仏法がもはやないと言われているが、經典はたくさん残っているではないか」と。先生は「經典があるだけで、正しい信仰がなければ、仏法はない。經典は、それだけでは、ただの本（書物）だ。仏法じゃないのです」と言わっていた。一と。

（私見）「入門」で引用された「法華経の智慧」下 117 頁、常不軽菩薩品の記述  
—「豈異人ならんや」と、大難 一の、その前には、竜の口の法難(大難)と  
日蓮大聖人の発迹顕本が記されているのです。そして、その後には、

池田先生のご指導—「法華経」を、紙に書いた二十八品のことと思ってはならない。仏法は「今」「この」、凡夫の「現実」のなかにしかないので。この「今」の奥底を「久遠」といい、この奥底を開くことを成仏という。それを教えたのが法華経なのです。一とあるのです。

私は、このご指導は、法華経は日蓮大聖人のために説かれたとの意義を再度ご教示されたのだと拝します。ゆえに、この「入門」の引用は、御書のご文と大難の真意を示さない、片手落ち、否、引用の価値を成さないと断言します。特に、一大難にあっている私もじつは釈尊なのだ。仏なのだだけを引用して終わることは、「入門」が、結果的に、池田先生のご指導の本意、すなわち、法華経の文底から日蓮大聖人を宣揚されておられることが伝わらないことになるのです！

続いて、「入門」186~189頁、**如來神力品第二十一**には以下の記述です。



上記に対して、「原本」中283頁、如來壽量品には\*—

釈尊の真意は「一念三千を見よ！」(\*如來神力品からだけでなく、他の引用です。)

遠藤 はい。先ほど、壽量品の「發迹顯本」の意義について、うかがいました。釈尊は、「永遠の法」即「永遠の仏」を師として仏になった。釈尊が師としたのと同じ永遠の法即仏を師とせよ、と弟子たちに説き明かしたのが發迹顯本である。そこには、”「人間・釈尊」に帰れ！ そして釈尊を仏にした根源に直達せよ！”との力強いメッセージが込められていた。—こうしたお話に、目の覚める思いがしました。齊藤 この「永遠の法」とは南無妙法蓮華經であり、「永遠の仏」とは南無妙法蓮華經如來すなわち久遠元初の自受用身のことですね。

池田 そうです。南無妙法蓮華經は法であるが同時に仏身なのです。人法一箇です。ここが大事なところです。「法」といっても「人（仏）」を離れた法は、「理」だけの存在です。実際には—「事」の上では—仏の智慧を離れた法というのではないです。久遠元初の仏—無始無終の常住の仏は、宇宙生命そのものであり、一瞬の停滞もなく、常に不斷に、一切衆生を救おうと活動しておられる。その仏と自分自身が、じつは一体であり、自分自身が久遠の昔から人々を救うため、広宣流布のために働いてきたのだ、今だけのことではないのだ—そう自覺するのが壽量品の心です。

齊藤 信仰が、人生が「根なし草」になってはならないということですね。それは「師弟」ということを忘れるなということだと思います。壽量品の真髓も、ここにあります。釈尊自身の「師」である「因果俱時不思議の一法」即「久遠元初の仏」を示さんとするのが壽量品の肝心ですから。ただ、經文には、その「一法」は示されていません。あくまで釈尊の本地は、五百塵点劫というはるかな昔からの仏であるというにとどまっています。

池田 だから「本果妙」なのです。久成の釈尊が、根源の一法を修行して、どうなったかという「結果」を説いたのが、文上の壽量品です。しかし、どうやって、その結果を得たのかという「本因」は明かされていない。言いかえれば、文上の法華經には「本尊」がないということです。絢爛たる説法が相次いで行われるのに、一体、結論として、法華經は何を本尊とせよと言っているのか、わからない。これが古来、多くの議論を呼び起こしてきたのです。ある意味で、本尊が説かれていないのは当然で、在世の衆生は、法華經に来て、皆、成仏してしまうわけです。その人には、もう本尊は何かわかっているわけです。しかし、滅後の衆生なかんずく末法の衆生は、そうではない—と。

さらに、「原本」下233～236頁、如來神力品には—

**「文底」が説かれて仏法は完結**

齊藤 前項で仏教の歴史を「仏因の探求」という観点から語っていただきましたが、その探求の究極が「壽量品の文底」にあるという結論になります。

ここまで至らないと、「生きとし生けるものを仏にしたい」という釈尊の願いも完結しません。

池田 寿量文底の「仏因」とは、言うまでもなく無始無終の妙法であり、南無妙法蓮華経です。これは「仏因」であると同時に「仏果」です。「因果俱時・不思議の一法」です。これを寿量品の説法を聞いて覚知したのです。寿量品を、虚空会上の”三十二相の、きらびやかな釈尊の話”と思ったら間違いでしす。その色相莊嚴の仏を見上げているだけなら、所詮は”他人ごと”になってしまふ。そうではなく、五百塵点劫の説法で、どんどん過去にさかのぼっていったあげく、自分の究極の”原点”は、釈尊の”原点”と同じであったと分かったのです。”虚空”を見上げていて、はっと”足もと”に気づいたのです。これが「等覚一転名字妙覚」です。(成仏の本因が南無妙法蓮華経如来であることを述べた文。等覚という最高位の菩薩でも、久遠元初の妙法を覚知して、「等覚」から一転して「名字即」という凡夫の位になり、そこから直ちに仏の位である「妙覚」になること)

須田 一段一段、成仏を目指して階段を上った果てに、じつは「出発点」に戻った。自分を生み支えている宇宙生命そのものを自覚したということになります。遠藤「具騰本種」というのも同じ意味ですね。(「具つぶさに本種を騰ぐ」と読む。妙楽大師の言葉。成仏の根本原因=本種は寿量品の文底に藏されており、この本種を覚知したがゆえに法華経の会座の衆生も成仏したとする) 齊藤 その「本種」が「南無妙法蓮華経」である。それを自覚した。

池田 文上を聞いただけで文底がわかった。そういう機根の衆生は、それでいい。しかし、わからない機根の衆生は、どうするのか。これが「滅後の弘教を上行菩薩に託した」理由です。上行菩薩という「菩薩仏」——すなわち「因果俱時・不思議の一法」を、その身に体現している人が、「因果俱時・不思議の一法」を弘めるのです。仏法では必ず「説かれる法」と「説く人」が一致しているのです。

齊藤 「法是れ久成の法なるを以ての故に久成の人に付す」ともあります。中国・唐時代の天台僧・道遷の『法華文句輔正記』の言葉。大聖人も觀心本尊抄〈御書二五〇ページ〉などで引用されている)

池田 日蓮大聖人は「本果妙の釈尊・本因妙の上行菩薩を召し出す事は一向に滅後末法利益の為なり」と仰せです。末法の機根の衆生には、まっすぐにそのまま、成仏の「本因」を久遠元初の妙法を説くのです。そのための如来神力品の付嘱です。一と。

(私見) 上記「入門」には、本種と菩薩仏の名前だけ引用で、その本義が記されていない! これでは、「法華経の智慧」の引用は偏頗、不十分である。池田先生のご指導に違背した論述と言わざるを得ない!

上記「法華経の文底」について、親友中村誠氏より以下寄稿を頂きました。

— 「「文底」が説かれて仏法は完結」と池田先生が述べられた箇所は極めて重要なのですが、調べてみると、この本は「文底」という言葉は三か所しか登場しません。しかもこれだけだと意味不明になります。これらがそうです。

方便品の冒頭での仏智の讚嘆は、文底から言えば、南無妙法蓮華経の讚嘆にほかならない。そこに、私たちがこの部分を読誦する最大の理由があります。 (Kindle 版 29 p、書籍 28 p)

文底から見るならば、妙音菩薩も、苦しみと戦い、戦い、また戦って、題目を唱え、人間革命したのです。 (Kindle 版 192 p、書籍 212 p)

その上で池田先生は、「文底から見るならば『觀音の名を称える』とは、觀音の力の根源である久遠の本仏『南無妙法蓮華経如来』の名前を唱えるということ」(下巻、三六一ページ) と言われているよ。 (Kindle 版 195 p、書籍 215 p)

これだけだと当然文底とは何を意味しているかが不明になります。これだけみても、この本が如何に酷いかが判明します。事実上、文底を否定していて、文上の釈迦仏法しかといていません。ですから、法華経の主人公を釈迦にしてしまっていますね。次の戸田先生の教えを完全に無視している。 —

「寿量品において「譬如良医」とは、久遠元初の自受用身、無作三身の如来、また、南無妙法蓮華経仏とも申しあげる（中略）譬如良医をインドの釈迦と読んではならぬ」(戸田城聖全集一巻、寿量品、p. 94)

当然池田先生はこの教え法華経の智慧の講義でも守ってきました。

「“良医と病気の子どもたち”の譬え

名誉会長： この「方便現涅槃」の意義は、良医病子の譬えを見れば、もっとはつきりするでしょう。

遠藤： はい。譬えのあらましを言いますと、良医が旅に出ていた間に、その子どもたちが毒薬を飲んでしまった。苦しんでいるところに、父の名医が帰ってきた。父は「大良薬」をつくって与えました。

須田： この名医は仏、子どもたちは衆生。大良薬は法華經であり、釈尊の師でもある「**永遠の妙法**」に当たります。末法でいえば御本尊です。

遠藤： そうなります。ところが、せっかく最高の薬が与えられたのに、毒気が深く入りすぎて、薬を飲もうとしない子どもたちがいた。飲んだ子どもは、たちまち元気になりましたが、飲まない子はどうしようもありません。苦しみ、のたうち回っています。

**名誉会長：** そういう子どもを「顛倒の衆生」という。病んで、治療を願つていながら、薬は飲みたくないというのだから「顛倒」です。道理がわからないくらい「毒気深く入り」になっている。大良薬も「おいしくない」と思つて拒否している。

寿量品では「本心を失っている」と言つています。わけがわからなくなっている。「頭破作七分（頭破れて七分に作る）」の姿と言つていいでしょう」

（法華經の智慧 4巻, p. 376-377、普及版中 p. 520）

会話の文脈から、**良医=日蓮大聖人**となっているのは明白ですが、これを「法華經入門」では、良医=釈尊としています。それが次です。

—「そう、釈尊の生命は永遠不滅。だけど、釈尊はあえて入滅（死）するの。その意味を示しているのが、寿量品の「良医病子の譬え」ね。—

（Kindle 版. 118 p、書籍 128 p）

中学生レベルの要約としても完全に失敗しています。悪質かつ劣悪で、ここまで酷い学会の本を私はみたことがないです。ーと、中村氏の論究です。

（私見）中村氏の指摘は、全くの正論です。

＊＊＊＊＊

以上で「入門」と「原本」の主要部を比較しました。

最後に、もう一つ、「入門」の如來壽量品第十六に欠落している法華經の最重要義「**本因妙**」についての池田先生の「原本」ご指導を引用致しますー

「原本」中 307～308 頁には—「因果一念の宗」の宇宙大のスケール

池田 許えて言えば、文上の「久成の釈尊」は、たわわに実った果物のような姿です。その果実の姿はすばらしいが、それをもたらした種子は経文の表には見えない。隠されているわけです。果実の中の種子を示すのが文底の仏法です。この点は、今後もさまざまな角度から論じことになると思うが、先ほど  
の「因果」論から言えば、大聖人は、御自身の本因妙の仏法を「因果一念の宗」と仰せです。

須田 「因果異性の宗」(方便權教)、「因果同性の宗」(法華經述門)、「因果並常の宗」(法華經本門)に対する「因果一念の宗」ですね。

池田 問題は「並常の宗」と「一念の宗」の違いです。文上の本門では、釈尊の一身に仏界(果)と九界(因)がともに永遠に具わっている(並常)と言っているだけで、そうならしめた「本因」は説かれていない。その本因とは「因果俱時不思議の一法」です。釈尊が師とした、この本因を、直ちに、そのまま説くのが「本因妙の教主」です。日蓮大聖人は、「其の教主は某なり」と宣言されています。

遠藤 「百六箇抄」の「我等が内証の寿量品とは脱益寿量の文底の本因妙の事なり、其の教主は某なり」のところですね。

池田 この「本因妙の妙法」こそ、法華經の寿量品の文の底に秘し沈められた「三世諸仏の本尊」であり「真の一念三千」なのです。この「一法」こそ、「本因」であり同時に「本果」でもある。「仏因」と「仏果」が同時ですと。

(私見) 上記ご指導に記された「因果一念の宗」(全 871、新 2220 頁)は御書の「本因妙抄」なのです。これから拝察し、池田先生は「法華經の智慧」を日蓮大聖人のご相伝である「本因妙抄」と「百六箇抄」、そして、「原本」全編で引用の「御義口伝」を用いて、文底の法華經、即ち、日蓮大聖人の南無妙法蓮華經、即ち、人法一箇の御本尊をご教示されているのです。 「入門」には「本因妙」と「本果妙」の区別がないのです！

この 30 年間、私たち世界の同志は、池田先生が日蓮仏法の真髓を大聖人の  
ご相伝書の真義からご指導された「法華経の智慧」により歓喜、感動  
の信心の歩みを続けられたのです!

それに対し、今回発刊の「法華経入門」の稚拙さと不整合さに、私は落胆しかありません。私は 30 年間、「法華経の智慧」を拝読してきました。世界中の同志も同じと拝察します。池田先生の本当の法華経論を心肝に染めてきました。ゆえに、今回の「法華経入門」に対しては、失望しかありません。

結論、「法華経入門」の底意は釈迦本仏論であり、それは、「教学要綱」の底意と同じなのです。「法華経入門」は、命懸けで信心をする学会員さんを見下げているとしか思えません！

あらためて、本日、日蓮大聖人のご生誕日、大聖人様と池田先生はこれほど酷い「法華経入門」に対し、どれほど嘆かれているか、私は心痛の極みです。

\* \* \* \* \*

あとがき

5日前、2月11日、戸田先生のご生誕日に YouTube <https://share.google/oifwYeB9yK8UtwoRg> を視聴しました。内容は昭和33年に発刊の戸田城聖先生の『法華経方便品・寿量品講義』の朗読です。私事ですが40年以上前、まだ「法華経の智慧」が発刊される前、神田の古本屋で見つけ宝物として拝読しました。池田先生が戸田先生から拝受された法華経講義がこの書と確信し、まさに、眼光紙背に徹して昼夜読みました。

この戸田先生の法華経講義こそが創価学会の折伏 75 万世帯への原動力がありました。私の母は戸田先生の方便品・寿量品講義を直接聴講し折伏に走りました。私も母の背中で戸田先生のお声を耳朶にしました。その戸田先生の生命からの獅子吼とも拝せる『法華経方便品・寿量品講義』を、なんと朗読で聞けますこと、これほどの喜びはありません。池田先生の恩師戸田先生の講義も学び、法華経文底の日蓮大聖人の仏法をさらに深く研鑽したく決意しています。ユーチューブには以下のあいさつがありました。ご紹介させて頂きます。—

皆様、大変お久しぶりです。本日、二月十一日、恩師・戸田城聖先生の御生誕記念日という佳節に合わせ、当チャンネルを再始動させていただくこととなりました。以前、私は池田名誉会長の『法華經方便品・寿量品講義』の朗読を配信しておりましたが、著作権上の配慮により、已む無く、全ての動画を削除いたしました。

これまで御視聴してくださった皆様には、多大なるご心配とご迷惑をおかけしましたことを、この場をお借りして深くお詫び申し上げます。活動休止の間、皆様からいただいた温かい励ましの声を支えに、「再び、正しき仏法の哲学を研鑽する場を作りたい」と切に願ってまいりました。

そこで本日より、心機一転、戸田城聖先生の『法華經方便品・寿量品講義』を拝読してまいります。戸田先生の峻厳な師子吼、ユーモア溢れる慈愛の言葉、そして日蓮大聖人の甚深の法理を、皆様と共に学び、自身の生命を磨く糧としていく決意です。

一言一句、恩師の魂を汲み取る思いで真剣に拝読してまいります。新しく出発する当チャンネルを、今後とも何卒よろしくお願ひ申し上げます。又、以前法華經の智慧で池田先生と座談されていた須田晴夫氏のホームページより（御本人の許諾を得て）引用の法華經の智慧について 講演要旨や、宮田論文への疑問 日蓮本仏論についての一考察の朗読も交互に配信して参ります。

イキイキ仏法広場「朗読」高橋純子一と。

＊＊＊＊＊

（私見）戸田城聖先生の『法華經方便品・寿量品講義』の朗読を、日蓮大聖人様と、牧口・戸田・池田の三代会長がどれほどお喜びか、私は感動でございます。

この拙文を親しき友人にもお伝え下さい。そして、皆様の忌憚なきご高見、ご指導を [kiiroibara.526@gmail.com](mailto:kiiroibara.526@gmail.com) に、お願ひ申し上げます。

敬具　　図斎修